

総合人文科学研究センター研究部門
「COVID-19 を経験した社会の人文学」

2022 年度第 2 回研究会の報告

日時：2022 年 7 月 22 日（金）18 時 00 分から 20 時 00 分
方法：Zoom 使用によるオンライン形式。

このたびの「COVID-19」研究、2022 年度第 2 回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む 12 名程度の参加者を得た。今回は、鴨志田聡子先生（招聘研究員）が「イディッシュ語とラディノ語のオンライン学習活動にみるユダヤ人マイノリティと COVID-19」という題目の下、話題提供を行った。また、松永美穂先生（本学教授）がコーディネータを担当した。以下に、鴨志田先生のご執筆による当日の発表要旨を掲げる。

報告者は、コロナ禍においてユダヤ人たちがおこなっているオンラインでの言語学習活動について、自身の参与観察（自分自身も活動に参加ながら観察する）をもとに紹介する。本報告ではまず、報告者の研究対象であるユダヤ人の定義とイディッシュ語（東欧出身のユダヤ人の独自言語）について基本的なことを確認する。そして、イディッシュ語のオンライン学習活動の詳細と、ラディノ語（スペイン・ポルトガル出身のユダヤ人の独自言語。ユダヤ・スペイン語とも）について紹介する。ユダヤ人の「死にゆく言語」の学習活動は Covid-19 を機に突如盛り上がったかのように見えた。しかし、実は活動の盛り上がりの背景には、Covid-19 以前からの「準備」の積み重ねがあったことがわかっている。ユダヤ人以外でもこういった活動が見られたのか、さまざまな地域についての専門家が集まる絵研究会において情報交換や議論ができれば幸いである。

（鴨志田聡子先生記）

発表後質疑では、COVID-19 以前から準備されてきた、イディッシュ語やラディノ語の話者のアイデンティティ形成/再構築への努力が、COVID-19 影響下におけるオンライン授業で急激な隆盛をみたことに関心が集中した。さらに、言語のみならず歌や踊りのような文化的なアイデンティティについても、同じ傾向が見られることが紹介された。

次回の研究会は、9 月末から 10 月に開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）